

# マージナル・マンとしてのフッサール

野 家 伸 也

## 序

フッサールの現象学は、フッサール自身についての個人史的な叙述を抜きにしても完全に理解することができる。——確かに原則論としてはその通りである。しかし現象学の誕生を告げる著作として『論理学研究』初版（一九〇〇・〇一）が出版されたとき、同時代の若き知識人たち——ミュンヘンゲッティンゲン現象学派、モスクワとペテルブルクに結集したロシア・フォルマリストたち、モスクワ言語学サークル、プラハ言語学サークルなどの構造言語学者たち——がフッサールの思想になぜあれほど熱狂したのかを理解するためには、フッサールの特異な出自がもたらした内的傾向について一瞥しておく必要がある。そこでまず最初に、フッサールの存在を規定していた具体的な環境、すなわち当時のユダヤ人が置かれていた歴史的状况に目を向けてみることにしよう。

総じて市民革命と、それにとまなう自由主義的改革とともにはじまったユダヤ人の「解放」は、ヨーロッパ各地でゲットー（ユダヤ人居住区）の解体を進めていったが、それは同時に、ゲットーの中で守られてきたユダヤ古来の家父長制的秩序の崩壊をも意味していた。すなわちユダヤ人は、法の前に平等な公民として

公認され、市民的自由を獲得すると同時に、ユダヤ人としての民族的アイデンティティの拠りどころとなるべき伝統的諸価値を剥奪され、根無し草的な存在となって西欧市民社会の中へ投げ出されることになったのである。この二重の意味での解体過程は、各地で一様に進行していったわけではなかった。たとえば同じドイツ語圏でも、西方ドイツでは、フランス革命軍の攻勢とナポレオンの行政命令がもたらした自由主義の波が、ゲッターの世界の崩壊を急激かつ強引に推し進めた。こうして起こった伝統からの突然の断絶は、西方ユダヤ人の知的エネルギーの極度の集中を促した。

## 1 西方ユダヤ人の「解放」

そうした急激な「解放」を経験した西方ユダヤ人の典型例としては、カール・マルクスの父ハインリッヒ・マルクス（一七七七―一八三八）を挙げることができる。ハインリッヒは、トリーアのラビ（ユダヤ教の聖職者、説教者）であったモルデシャイ・ザムエル・レヴィ（マルクス・レヴィ）（一七四三―一八〇四）の次男として生まれた。両親はトリーアのユダヤ人教会堂に住んでいて、彼もそこで貧困のうちに育った。ハインリッヒはユダヤ人教会の書記として、父の後を継いでラビとなった兄ザムエルとともにユダヤ人の状態を改善しようとしていた。しかしハインリッヒ一二歳のときに勃発したフランス革命が彼の運命を変えることになる。

トリーアはライン左岸に位置し、フランス国境まではわずか三〇キロで、ローマ・ガリア時代からフランスとつながりがあり、ドイツの中で最も早くフランス文化の影響を受ける街であったが、一七九四年にはナポレオン軍の侵攻を受けてフランスに併合された。これにともなうナポレオン法が適用され、「自由・平

等・友愛」というフランスの基本原則のもとトリーアのユダヤ人に職業選択の自由が保障されることになった（フランスでユダヤ人解放令が出され、フランスのユダヤ人がキリスト教徒と同じ権利を得たのは一七九一年のことである）。このときハインリッヒは貧困から抜け出ようと弁護士への道を志した。すでに三〇歳に近い年齢であったが、ベルリン大学の聴講生となり、コブレンツにできた法学校に通ったあと、トリーアの地方裁判所に勤め始めた。

ところが一八一五年（カールが生まれる三年前）ナポレオン軍の敗退のあと、トリーアはプロイセン王国に併合されることになった。プロイセンがライン左岸地域（ラインラント）をフランスに対する軍事的前線基地としたからである。プロイセンに併合されたことによって、ナポレオン法は廃止され、代わってプロイセン法が適用された。自由主義的改革は後退し、市民の自由は大きく失われ、ユダヤ人差別が完全に復活した。ユダヤ人が公民となる道は次々と閉ざされ、あえて公民となろうとすれば、洗礼を受けてキリスト教徒になる以外に道はなくなってくる。公職を失う危機に陥ったハインリッヒは改宗するか職業を捨てるかの二者択一を迫られることになり、結局は一八一七年頃にプロテスタントに改宗した（一九世紀初頭のトリーアは、住民の九五％がカトリックだったが、世俗的な名誉を求めていたハインリッヒは敢えてプロイセンの宗教であるプロテスタントを選んだのである。なおカールは一八二四年、六歳のときにプロテスタントに改宗した）。こうした混乱した状況の中でハインリッヒはトリーアの地方裁判所の弁護士となる。そしてトリーアの数少ない有能な弁護士として弁護士会の中心となり、市の評議員になろうとするが一八三八年に世を去り、その夢は果たせなかった。

以上、「解放」された西方ユダヤ人の典型としてのハインリッヒ・マルクスの事績を簡単に見たわけであ

るが、これだけの叙述からも、ハインリッヒが（一）ドイツ文化とフランス文化、（二）ゲットーの伝統的社会と西欧市民社会、（三）ナポレオン法の体系とプロイセン法の体系、（四）ユダヤ教とキリスト教、（五）プロテスタントとカトリックというように、幾重にも折り重なった二つの異なる文化間の対立の中に巻き込まれ、二つの文化の対立を彼自身の内面の葛藤として経験したことが分かる。これは社会学者ロバート・E・パークが「マージナル・マン」（境界人）と呼んだ人々に見られる特徴である。

パークによれば、二つの文化の緊張関係を自身の内面の葛藤として経験した個人は、一つの安定した文化による方向づけを失ってしまうが、同時に既存の文化から解放されてより自由になる。この〈方向づけの喪失〉と〈解放〉の両局面を経ることにより、その個人の性格に或る変化が生じ、そこに新しい人間類型が生まれる。それがマージナル・マンである。マージナル・マンにおいては、かつて慣習や伝統によって制約されていた知的エネルギーは解放される。そして彼は、既存の文化の世界を「異邦人」の眼で見ることができるようになる。したがってマージナル・マンは、何らかの意味におけるコスモポリタンとなるのである。そしてパークによれば、解放されたユダヤ人こそ「決して完全には浸透し合わず、融合もしない二つの文化ないし二つの社会の境界（マージン）にたたずむ人間」<sup>①</sup>すなわちマージナル・マンであり、世界最初のコスモポリタンなのである。

ハインリッヒは、パークが言う意味でのマージナル・マンの典型であり、その実績は、ゲットーの中で制約されていたユダヤ人の知的能力が解放され開花した例である。そして息子のカールの代になると、ユダヤ人の知的能力は文字通り爆発的な開花期を迎えることになるのである。

## 2 東方ユダヤ人の「解放」

一方、市民革命の遅れた東方ドイツのプロイセン王国やハプスブルク帝国（オーストリア帝国、一八六七年から一九一八年の帝国終焉まではオーストリア＝ハンガリー帝国）では、ユダヤ人の解放は徐々にしか進行しなかった。プロイセン王国領内のユダヤ人に最終的に完全な法的自由がもたらされたのは、ビスマルクによって達成されたドイツ統一のあと、一八七一年である。一方、後に述べるように、ハプスブルク帝国治下のユダヤ人の社会的解放が完成されたのは一八六七年である。いずれの場合も西方ドイツに遅れること約半世紀であった。そればかりではなく、ハプスブルク帝国領内では、都市においてこそ、解放の進展とともにゲットーを出る者が多くなったが、農村部、特にボヘミア、モラヴィア、ガリシアの各地方には、依然として「シュテトル」と呼ばれるユダヤ人村落共同体が根強く残存し、家父長制的伝統が保守されていたのである。

エトムント・フッサールが生まれたのは、そうしたシュテトルの一つ、現在のチェコ共和国（一九九三年にチェコスロヴァキア共和国から分離独立）の東部、モラヴィア地方の中部の市場町プロスチェヨフのユダヤ人集落である。人口の統計で見ると、フッサールが生まれた当時のモラヴィア中部にはチェコ語を話す（そしてドイツ語を強要された）スラブ系の民族であるチェコ人のほか、少数民族としてはかなり数の多いドイツ人（集中的に住んでいたのは北部のズデーテン地方）と少数のユダヤ人が住んでいた。言語的に見ると、この周辺はドイツ語圏の東のはずれであり、ドイツ人が住む地域は「言語の孤島」となっていた。

フッサールは一八五九年四月八日に生まれた。両親ともユダヤ人であった。フッサールが生まれた頃のチェコは三〇〇年以上に及ぶハプスブルク帝国の支配下にあり、フランツ・ヨーゼフ1世（在位一八四八―一九

一六)の治世であった。カトリックを国教とするハプスブルク帝国は一五世紀のフスによる宗教改革以来のプロテスタントの伝統をもつチェコにカトリック信仰を強制し、さらにドイツ語を強要してチェコ語を抹殺しようとしたので、プロスチェヨフもドイツ風にプロスニツと呼ばれていた(チェコ人のナシヨナリズムの高まりを背景としてチェコ語が公用語となり、行政上ドイツ語と同等の地位を獲得するようになったのは一八八二年のことである)。このようなわけで、フッサールは「チェコ生まれ」の哲学者であったと一応は言えるのであるが、より正確には「モラヴィア生まれ」と言うべきであろう。もともと「チェコ」というのは、チェコ共和国の西部、プラハを中心とするボヘミア(英語名、ドイツ語名はベーメン)地方のみを指す名称であったが、現在では西部のボヘミア地方、東部のモラヴィア地方、そして北東部のシレジア地方の一部の三地域から構成されるチェコ共和国の領土全体を「チェコ」と称している。したがってフッサールの生地は「広義のチェコ」(チェコ共和国と同義)ではあったが「狭義のチェコ」(ボヘミアと同義)ではなかったということになる。ちなみに一九世紀から二〇世紀初頭にかけてのモラヴィアは、後に二〇世紀の思想界に深甚な影響を与えることになる学者を、他に三人輩出している。フッサールと同じくユダヤ系である精神分析学の創始者ジグムント・フロイト(一八五六―一九三九、フライベルク生まれ)、不完全性定理を証明した数理論理学者クルト・ゲーデル(一九〇六―七八、ブルノ生まれ)、物理学者にして哲学者のエルンスト・マッハ(一八三八―一九一六、キルリッツ生まれ)であり、この三人とフッサールは、モラヴィアを出てウィーンで学んだという点が共通している。

当時のモラヴィアのユダヤ人の大部分は商人であり、フッサールの父親も織物商を営んでいた。フッサール家は数百年前からプロスチェヨフに定住していた旧家であるが、ドイツ語を日常語としていた。こうした

フツサールの複雑な民族的・文化的出自を理解するためには、ハプスブルク帝国治下のユダヤ人が置かれていた歴史的状況について一瞥しておく必要がある。

ハプスブルク帝国では、マリア・テレジアの息子ヨーゼフ2世（在位一七六五・九〇）の改革以来、ユダヤ人の解放が徐々に進行していった。一八四九年にはユダヤ人にも大学教育を受ける権利が認められた。さらに一八六七年に制定された国家基本法によって、ハプスブルク帝国治下のユダヤ人の例外規定が最終的に撤廃された。これによってユダヤ人は居住の自由、土地所有や企業経営の権利を認められ、実業家、大学教授、医師、法律家、高級官吏などへの道が大きく開かれた。同時にそうしたユダヤ人の社会的進出を快く思わない人々による反ユダヤ主義運動も激化していったのであるが、ともかく一九世紀末になると社会的解放に伴うユダヤ人の知的能力の爆発的開花が見られたのであり、フツサールとフロイトはそれを象徴する存在であった。

フツサール家がチェコ人ではなくてドイツ人に同化してドイツ語を母語としていたことの背景には、彼らの社会的上昇志向があったと思われる。ドイツ人はハプスブルク帝国の中心地であるウィーンと密接な関係をもっていたからである。フツサールは幼年時代を回想して、「私は自分がドイツ人以外の何者でもないと感じていましたし、そう感じる事ができました。……私は自分が民族的にユダヤ人だということを忘れていました」と語っている。モラヴィア生まれのユダヤ人であるフツサールが自らを「ドイツ人」だと思っていたというのは、われわれにとってはたいへん理解しにくいことであるが、ここで言われている「ドイツ人」とは民族的概念ではなくて文化的概念であり、自らの文化的アイデンティティを表わす言葉であると考えるべきであろう。またハプスブルク帝国では「……人」という言葉の使い方には、出身郷土を基準とす

る場合と使用言語を基準とする場合と二通りあったので、フッサールは前者の意味では「モラヴィア人」であつたが、後者の意味では確かに「ドイツ人」であつた。実際に当時のモラヴィアではドイツ語を話すユダヤ人はほとんどの場合「ドイツ人」の中に数え入れられていたのであるから、フッサールが「ドイツ人としての自覚」をもっていたというのは、それほど不思議なことではなかつたのである。

チェコ人が多数派を占める土地で、チェコ人にとっては「外国語」であるドイツ語を話していたということとは、フッサールの使うドイツ語に土着性を欠いた、いわばコスモポリタンの独特の性格を与えることになり、そのことは後に彼の哲学の叙述のスタイルにも反映されることになる。この点は、フッサールの弟子であつたハイデガーが、ドイツ語に固有な土着的な表現を意識的に多用するというスタイルで哲学を叙述したことと対照をなしており、フッサールとハイデガーの「すれ違い」はここにすでに準備されていたと言えるかもしれない。

さらに付け加えておかなければならないのは、フッサールがユダヤ人でありながらキリスト教に改宗したということである。もっともフッサールは名目上ユダヤ教徒として生まれただけで、フッサール家は実際には無宗教だつたので、「改宗」という言葉を使うのは適切ではないかもしれない。彼は少年時代には宗教に關してはまったくの白紙状態だつたようである。彼がはじめて新約聖書に接したのは、ライプツィヒ大学に入学した一七歳のとき（一八七六年）であり、同大学の哲学研究会で出会つた同郷の先輩トマーシュ・マサリク（後のチェコスロヴァキア共和国初代大統領）の勧めによるものである。J・エスタライヒャーによると、この年彼は聖書を手にして牧師のもとに行き「この書物にもとづいて洗礼を受けたい」と述べたが、彼は聖書の解釈も、立ち入った信仰の宣言も欲せず、ただ自分なりに理解しているキリスト者として迎えられ



ることを望んだという。彼はその一〇年後（一八八六年）の二七歳の誕生日にウィーンの中央ルター教会において正式に洗礼を受けて、ルター派のプロテスタントに改宗したが、そのときも「彼の気持ちは十年前とさして変わってはいなかったのである」<sup>⑤</sup>。フッサールの改宗に最も大きな影響を与えたと思われるマサリクにしても、一九世紀の知識人の間によく見られた宗教、すなわち「切り縮められたキリスト教」を奉じていて、理性を超える事柄をすべて拒否していたというのである。そのようなわけで、フッサールにとって改宗とは、あくまでも西欧市民社会への「通行証」を手に入れるという意味合いのものであったと考えるべきであろう。プロテスタントを選んだことも、マサリクとフッサールの出身地であるモラヴィアにフスによる宗教改革以来のプロテスタントの伝統があったという歴史的事情によるものであり、そこに過剰な意味を読み込むべきではないであろう。

いずれにしても、フッサールが生まれ育ちから言えば「モラヴィア人」であり、言語的・文化的に言えば「ドイツ人」であり、民族から言えば「ユダヤ人」でありながらキリスト教徒であり、さらに国籍から言えば「オーストリア人」であるという、きわめて複雑で重層的な民族的・文化的出自をもっていたという事実、彼の哲学のもつ際立った特質に説明を与えてくれるものであろう。それは「マージナル・マン」的な知識人に見られる一つの特質である。すなわち、自己の内にある文化的境界性（マージナリティ）を生かして、自分が属する社会の「自明視」された「相対的・自然的世界観」（マックス・シェーラー）を徹底的に「非自明化」し、文化的特殊性も歴史的偶然性も経験的相対性も超えた、普遍的かつ必然的な認識を目指すということである。

### 3 構造主義の哲学的基礎づけ

まさにこうしたフッサールのマージナル・マンとしての思考態度が二〇世紀前半の知的世界に起こった「構造主義」の運動と共振現象を起こしたのである。ただしここで言う「構造主義」とは、一九六〇年代にパリで起こった「構造主義ブーム」のことではなく、それ以前にロシア・東欧を中心に起こった知的運動とその背景となった二〇世紀前半の諸学問に共通する動向のことである。この運動の最も自覚的な担い手だったのはプラハ言語学サークル（一九二六年に創設）に結集した構造言語学者たち（トゥルベツコイ、ヤーコブソンなど）、および構造言語学の影響を受けたロシア・フォルマリストと呼ばれる文藝学者たち（ムカジヨフスキー、ボガトウイリヨフなど）であった。

トゥルベツコイは「現代の音韻論」（一九三三）において、「我々の時代は、科学上の凡ゆる学科が原子論を構造主義に替え、個体主義を普遍主義（もちろんこれらの語の哲学的意味において）に替えようという傾向を以て特徴とする。こうした傾向は、物理学、化学、生物学、心理学、経済学等<sup>(4)</sup>にみられる。それゆえ、現代の音韻論は孤立無援ではない。それは更に広き科学的運動の一部をなす<sup>(4)</sup>」と述べていた。

同様のことはムカジヨフスキーによっても明確に語られている。たとえば「シクロフスキーの『散文の理論』のチェコ語訳に寄せて」（一九三四）では、「文学理論および文学史における構造主義が、孤立した例外ではないことに、注意を促しておきたい。構造主義に到達しようとする点で、文藝学は、同時代の科学的思考の一般的な傾向と軌を一にしているにすぎないのである<sup>(5)</sup>」と述べ、また「美学および文藝学における構造主義」（一九四〇）では、構造主義は個人の「発明」に関わるものではなく、「近代の学問の歴史における発展上必然の段階である。……今日すでに心理学、言語学、一般美学と個々の藝術の理論と歴史、民俗学、地

理学、社会学、生物学、それにおそらく更に他の諸学問における構造主義について語ることができる<sup>(6)</sup>」と述べていた。

二〇世紀前半の諸学問に共通した動向が見られるという認識はブラハ言語学サークル全体に共有されていたものであって、それはヤーコブソンがブラハの週刊誌『行動』の一九二九年一〇月三一日号に書いた次のような言葉に見事に要約されている。

「現代の諸科学の指導的理念を、その多様な現れのすべてにわたって、一つ概念のうちに把握しようとするならば、構造主義 (structuralism) にまさる適切な名称は、まず見出し得ないだろう。今日、いずれの現象群にせよ、これを科学的に研究するならば、それらの現象は機械的な集積としてではなく、構造的な全体として扱われており、研究の基本的な任務は、その内的な——静態的もしくは動態的——法則を発見することにある。科学的関心の焦点としては、もはや外からの刺激ではなく、発展の内的な条件が立ち現れる。今や、諸過程の機械的な把握が、機能の問題に席を譲るのである」<sup>(7)</sup>

ヤン・パトチカはブラハ哲学サークルで一九三八年五月一三日に行なわれたフッサール死去 (同年四月二八日) 直後の追悼講演において、フッサールは「イデーの新たな発見」を成し遂げたと述べ、二〇世紀前半の諸学問に共通した動向 (カッシーラーが「実体概念から関数概念へ」という用語で語った方法論上の転換) としての「構造主義」は『論理学研究』の哲学のうちにその精神的拠りどころを見出したのだ<sup>(8)</sup>と明言していた。<sup>(9)</sup>

またカッシーラーも「現代の言語学における構造主義」において、ブラハの構造言語学の理論的支柱となつたのは『論理学研究』初版だったと述べていた。カッシーラーによれば、ライブニッツに始まり分析哲学者

たちに受け継がれた真理の区別、すなわち経験的な事実から得られた「事実の真理」と、数学や論理学に見られるような普遍的かつ必然的な「理性の真理」という真理の二分法をいかにして克服するかという課題が、まさに言語学の方法の問題として構造言語学者たちの前に立ちふさがっていた。一九世紀以来の比較言語学のあり方に典型的に見られるように、言語学が言語という対象についての経験科学であるとするならば、言語学は「事実の真理」しか扱うことができないことになる。これに対して構造言語学者たちは、言語という対象の中に諸機能、諸関係の秩序ある構造を見出し、そこに普遍性と必然性を認めようとしていた。このとき、経験科学の対象とされるものの中にも数学や論理学の対象と同様の「イデアルなもの」が「それ自体として」潜んでおり、「それは特殊な経験的真理に左右されず、普遍的かつ必然的なものである」<sup>⑩</sup>というフッサールの思想が、構造言語学者たちにとっては大きな励ましとなった。言語の中の諸機能、諸関係の秩序ある構造、すなわち「イデアルなもの」を「経験的なもの」から峻別し（それが『論理学研究』第一巻のテーマである）、「イデアルなもの」を対象とする限り、言語学は数学や論理学と同様の普遍性と必然性を備えた学問になることをフッサールが保証してくれたのである。しかもフッサールは「イデアルなもの」を「それ自体」として把握する方法として「本質直観」を提唱していた。プラハ言語学サークルに結集していた若き知識人たちがフッサールの現象学に熱狂したのも当然であろう。

ただしここで注意しなければならないのは、彼らが熱狂した「フッサールの現象学」が超越論的現象学のことではない、ということである。『論理学研究』において成立した現象学は超越論的現象学だけではない。別稿<sup>⑪</sup>でもすでに述べたことであるが、エルマー・ホーレンシュタインによれば、『論理学研究』は三つの際立った現象学的潮流の出発点と見ることができ、三つの著しく異なった部分の各々がその出発点となってい

るのである。<sup>(12)</sup>

第一の流れは形相的現象学である。その担い手はミュンヘン大学のテオドル・リップス門下の若き俊才たちを中心とするミュンヘンゲッティンゲン現象学派で、彼らが依拠した部分は『論理学研究』の第一巻と第二巻の第二研究（「スペチエスのイデア的単一性と近代の抽象理論」）である。ミュンヘンゲッティンゲン現象学派は『論理学研究』の持つ三つの側面にとりわけ傾倒した。すなわち心理主義に対する徹底した批判、「イデアルなもの」（形相あるいは本質必然性）の自体的存在の主張、そして「イデアルなもの」をとらえる方法としての本質直観の重視である。『論理学研究』初版刊行直後の一九〇二年、当時ミュンヘン大学のリップス門下の学生だったヨハネス・ダウベルト（一八七七―一九四七）はこれを全巻読破して感激し、著者フッサールに会うためにミュンヘンからゲッティンゲンまでの約四〇〇キロの道のりを自転車で走破したという。これはミュンヘンゲッティンゲン現象学派の人びとの『論理学研究』への熱狂ぶりをよく示すエピソードであろう。

第二の流れは構造現象学である。その担い手は上述したプラハの構造言語学者たちやロシア・フォルマリストたちで、彼らが重視した部分は第一研究（「表現と意味」）、第三研究（「全体と部分に関する理論について」）、そして第四研究（「独立的意味と非独立的意味の相違ならびに純粹文法理念」）である。プラハの構造言語学者たちが特に注目したのは〈不変体〉（インヴァリアント）の持つ形相的性格、その「直観への所与」というよりは〈構造〉としての性格（さまざまな〈変異体〉を通して〈不変体〉としておのれを与えること）であった。特に第三研究における全体／部分関係についての理論はヤーコブソンの構造言語学において〈構造〉概念の成立を促し、さらにヤーコブソンを介してレヴィ＝ストロースの構造人類学の成立にも機

縁を与えた。第三研究は、ロシア・東欧に始まりバリに受け継がれた構造主義的思考の源泉となったのである。

第三の流れである超越論的現象学は、第五研究（「志向的体験とその《内容》」）と第六研究（「認識の現象学的解明の諸要素」）における「超越論的転回」すなわち意識の志向的構造へのラディカルな諸洞察の成果である。超越論的現象学の主要な関心事は主観と客観の内在的相関関係で、この超越論的な現象学運動の担い手は、フッサール自身を含むフラインブルク現象学派である。

このうちの第一の流れと第二の流れは、いわば独立した生命体となって、フッサールの手を離れて自己展開していったのであるが、フッサール自身は第五、第六研究で確立した超越論的現象学こそが唯一の正統的な現象学であると思い定めるに至った。そしてその立場から『論理学研究』全体を眺めてみると、そこに余りの不統一があることに愕然とし、全体を改訂する必要を痛感した。しかしすぐに改訂作業に取り掛かったわけではなく、まずは超越論的現象学の体系を叙述する著作の起草を優先させた。そして『イデーンI』を起草したあとに『論理学研究』の改訂に着手したのである。

フッサールは『論理学研究』第二版を出版するに当たって、超越論的現象学の立場から『論理学研究』全体を統一しようと試みた。これはフッサール自身にとってはどうしても必要な改訂であったが、この改訂によって、もともと超越論的現象学とは異質な形相的現象学や構造現象学に超越論的現象学が接ぎ木されることになって、『論理学研究』のテキストは異質な思想が混在する解りにくいものになってしまった。そして何よりも問題なのは、形相的現象学や構造現象学の独自性が曖昧なものになったために、『論理学研究』第二版から、初版が持っていたような歴史的インパクトが失われてしまったことである。

そこで本稿では『論理学研究』のテキストを初版の状態に戻して読むことで、『論理学研究』初版が持っていた歴史的機能の一端を第四研究までの展開に則して明らかにし、さらにその歴史的機能の由来をフッサールの個人史と社会史が交差する地点に求めたわけである。しかしフッサールが、これこそ唯一の正統的な現象学であると思い定めた第五・六研究以後の超越論的現象学は形相的現象学や構造現象学とは著しく異なる観念論的色彩を帯びている。そのためミュンヘンゲッティンゲン現象学派の弟子たちの多くは、フッサールの思想の変貌についていくことができずに離反し、フッサールは悄然としてフライブルクに去っていくことになったのである。この超越論的現象学の突然の出現には、本稿で明らかにしたようなフッサールの個人史と社会史との関わりとはまったく別な背景がありそうである。それを探究することがわれわれの次の課題となる。

## 註

- (1) R. E. Park, *Race and Culture*, New York: Free Press, 1964, p.354.
- (2) *Husserl-Chronik* (Husserliana Dokumente Band I) Den Haag: Martinus Nijhoff, 1977, p.3.
- (3) J・エスタライヒャー(稲垣良典訳)『崩れゆく壁——キリストを発見した七人のユダヤの哲学者』(春秋社、一九六九)六三頁。
- (4) トウルベツコイ(小林英夫訳)「現代の音韻論」小林英夫『言語研究——問題篇』(三省堂、一九三七)一五六頁。
- (5) 桑野隆・大石雅彦編『ロシア・アヴァンギャルド6・フォルマリズム——詩的言語論』(国書刊行会、一九八八)二二一頁。
- (6) ヤン・ムカジョフスキー(平井正・千野栄一訳)『チェコ構造美学論集』(せりか書房、一九七五)一七・一八頁。
- (7) Roman Jakobson, *Selected Writings* II, The Hague: Mouton, 1971, p.711.
- (8) Edmund Husserl *zum Gedächtnis*, Zwei Reden, gehalten von Ludwig Landgrebe und Jan Patočka, Akademie Verlagbuchhandlung

Prag, 1938, p. 25.

(9) *Ibid.*, P. 24.

(10) E. Cassirer, *Geist und Leben*, Reclam Verlag Leipzig, 1993, p.322. カッシーラーは一九四五年二月一〇日にニューヨーク言語学サークルにおいて「現代の言語学における構造主義」と題する講演を行なったが、そのわずか二ヶ月後の四月二三日、奉職先のコロンビア大学構内で突然心臓発作を起こし、帰らぬ人となった。この講演は文字通り、カッシーラーの「白鳥の歌」となったのである。

(11) 拙稿「フッサールにおける構造現象学の展開——ロシア・東欧からパリへ——」東北大学哲学研究会『思索』第五二号(10010)

(12) cf. E. Holenstein, *Linguistik, Semiotik, Hermeneutik*, Suhrkamp, 1976, p. 58f.

#### 参考文献

- 的場昭弘『トリーアの社会史』（未來社、一九八六）
- ハイコ・ハウマン（平田達治・荒島浩雅訳）『東方ユダヤ人の歴史』（鳥影社、一九九九）
- 林忠行『中欧の分裂と統合』（中公新書、一九九三）

（のえ しんや・東北工業大学名誉教授）